

## ダニエル・デフォー

## 『ペストの記憶』(12)

訳 武田将明  
Takeda Masaaki

そのまま心に呼び覚ますことはできないけれど、このぼくの発言に対して返ってきたのは、墮落した、忌まわしい罵詈雑言だった。やつらを少しも恐れずズバズバもの言うのにムカついたみたいだった。いや思い出せたとしても、あのときの言葉、おぞましい罵りと呪いや下品な言い回しの数々のどれ一つとして、この記録に留めるつもりはない。あのころには、どんなにひどくて低俗な連中でも街角で用いたりしない言葉だった。(というのも当時、あの決して悔い改めない化け物どものほかは、周りにいたどんな邪悪な連中でも、このように一瞬で人びとの命を奪っていく力の使い手を畏れる気持ちがいくらかはあったんだ。)

ただ、やつらの悪魔のような発言のなかでも最悪だったのは、俺たちは神を虚仮にすることも、神なんていないと言うことも怖れやしないというものだった。ペストは神の手がもたらしたものだ**とぼくが言うのをバカにして、「裁き」という言葉**

をからかい、しかもなんとゲラゲラ笑ってみせた。これだけのものを奪い去る一撃が下されるのに、神のご意思など関わっていないと言わんばかりだった。また馬車が死体を運ぶのを見て神に呼びかける人びとは全て狂信者で、頓珍漢な勘違い野郎どもだとも言っていた。

ぼくはやつらになるべく適切な言葉で返答したけれど、やつらのおぞましい話しぶりは収まるどころか、なおいっそう激しくなり、これを聞いたぼくは恐怖と燃えるような怒りで満たされた。そこで、ロンドン全体を襲った裁きの手が、あなたがたと周りのみなさんに復讐し、その力を見せつけなければよいのですが、と告げてその場を後にした。

やつらはこうした批判をすべて心の底からバカにしてみせた。できるだけひどくぼくをからかい、「俺たちに説教しやがった」(とやつらは言ったのだが)ことへの傲慢で屈辱的な言葉を思いつく限り並べた。これを聞いたぼくは、実は怒るよりもむしろ悲しくなった。でもそこを立ち去るとき、心のなかで神に感謝した。あんなに侮辱を受けたのにやつらを見捨てなかったのは、神のおかげだったからだ。

それから三、四日、やつらはこんな墮落した態度を改めることなく、信心深い様子や深刻な表情を見せた人びとや、神がぼくたちに下した畏ろしい裁きを少しでも感じ取った人びとを次から次へと嘲り笑っていた。さらに聞いたところでは、感染の広がりにも怯まず教会に集い、食事を断ち、どうか裁きの手から逃れさせてくださいと神に祈る善良な人びとをも、おなじように嘲笑していたようだ。

さっき、このおぞましい態度をやつらは三、四日改めなかったと言ったけれど、それ以上は続かなかつたみたいだ。という

のも、このときやつらの一人、それも「墓場から出てなにやってんだ」と哀れな男性に訊ねた者が、ペストという天の裁きによって実にむごたらしい死を遂げたからだ。そして手短に言えば、やつらは一人残らずあの巨大な穴に運ばれた。さっきお話ししたとおり、あの穴はだいたい二週間もしないうちにすっかり埋まったんだけど、それより前のことだった。

この男たちは数々の非常識な言動で罪を犯していたが、それはあのことろのような、みんなが恐怖に怯えていた時代には、人の心を持っていれば考えるだけで身震いするほどのものだった。なかでもひどかったのは、人びとが信仰心を見せる場面に遭遇すると、例えばこの嘆きのときに天国からのお慈悲を願ひ、共に祈りを捧げる場所にみんなが群がるのを見たときなど、バカにして嘲笑うことだった。しかもやつらが会合を催すこの酒場は教会の入口が見える位置にあったために、こうして神を穢し、否定する歡びにふける機会にたっぷり恵まれていた。

でもそんな機会も、さっき話した出来事より前に少し減りだしていた。いまやロンドンのこっち側でも感染が猛威をふるい、人びとは教会に来るのを怖がりだしたんだ。少なくともいづれもほど多数がそこに通うことはなくなった。聖職者のなかにも亡くなった人は多く、しかも地方に去った人もいた。無理もない。こんなときにロンドンに留まってみせるだけじゃなく、さらに教会に出かけて会衆の前で牧師の務めを果たすことなど、弛まぬ勇氣と挫けぬ信仰がなければ本当に不可能だった。でも、会衆の多くが実はペストに感染していてもおかしくないと知りながら、毎日、いや一日に二回も牧師が礼拝を司る教会もいくつかあった。

みんながこうした敬虔な勤めに並々ならぬ熱意を見せたのは確かだった。教会の扉はいつでも開いていたので、牧師が礼拝を行っていてもいなくても、好きな時間にひとりで来ては信徒用の個室<sup>1</sup>に鍵をかけ、心からの情熱を傾けた祈りを神に捧げていた。

国教徒でない人たちもそれぞれの礼拝施設に集まった。現状への考えは宗派ごとに様々だったけれど、すべてがごちゃ混ぜにあの連中の笑いの種になったんだ。とくに病の流行が始まったころはね。

でも、やつらがこんなふうにはっきりと宗教を虚仮にするのは、様々な宗派の善良な人たちからよく注意されていたようだ。このことと、ぼくが思うに感染が猛烈に広がったことが理由で、少し前から連中は無遠慮な態度をかなり和らげていた。けれどあの男の人が酒場に運びこまれたときは、たちまち大騒ぎになったので、下品で罰当たりな気性が掻き立てられたんだ。そしてたぶん、ぼくが<sup>たしな</sup>窘める役を引き受けたときにも、連中はおなじ悪霊に<sup>そそのか</sup>唆されたんだらう。といっても、ぼくはできるだけ穏やかに、抑えて、失礼のないように話し始めたのだけれど、かえってしばらくはやつらの罵声がいっそう激しくなった。連中が憤るのを見てこっちが怖じ気づいたと思ったらしい。あとで全くの見当違いだと気づいていたけれど。

<sup>1</sup> 原語は“separate pews”。“pew”は通例「信徒席」と訳すが、OEDによればかつては周囲を仕切られた個室状の席を意味していた。他方、今日私たちが「信徒席」で連想するような、礼拝堂に横に並べられた共用の座席の意味も持つようになったのは、十七世紀からだという。文脈からここでは明らかに古い方の意味である。

あの連中のおぞましい悪人ぶりを見て本当に気分が落ちこみ、思い悩みながら帰宅した。けれどもやつらが神の正しさを示す恐ろしい見せしめとなるのを疑わなかった。この悲惨なときは、神が天罰を下すために特に選ばれたものだとぼくは見なしていた。神はこの機会に、他の時期よりも際立った、明白なやり方で、その心に背く相手を確実に選び出すだろう。なるほど、みんなが災いに巻きこまれ、たくさんの善良な人たちが斃れるかもしれない、いや事実斃れていたはずだし、こんな誰もが滅びていくなかで特に抜き出されたからといって、それがあつた人間の永遠の地位についてあれやこれやと判断を下す確かな規則になるわけがない、というのも本当だろう。それでもぼくは言いたい。こんなときに、神の名と存在を穢し、天罰を認めず、神を信じる心と信じる者を嘲笑い、公然と挑んでくる敵を慈悲の心で赦すのを神は正しいとは思われまいだろう。こう信じるのは、ごく当たり前のことだ。やっぱりあり得ない。ほかのときなら、情け深い神はやつらを見逃し、赦してやるのが正しいと思われたはずだけれど。いまは病の広まる日、神の怒りの日だ。するとこんな言葉がぼくの頭に浮かんだ。エレミヤ書5章9節。「こうしたことのためにわたしが手を下さないというのか、主は言われる。このような民族<sup>ネーション</sup>にわたしの心は復讐をしないというのか。」<sup>2</sup>

そう、こういうことがぼくの心にのしかかった。だからやつ

<sup>2</sup> これはエルサレムの人びとの墮落を預言者エレミヤが弾劾する場面からの一節である。なお、『新共同訳』によれば、この次の一節(『エレミヤ書』5.10)は「ぶどう畑に上って、これを滅ぼせ。しかし、滅ぼしつくしてはならない。つるを取り払え。それは、主のものではない。」となっている。

らのゾツとするような悪人ぶりにもものすごく落ちこみ、重苦しい気持ちになりながら帰宅したんだ。まったく、あんなやり方で、しかもいまみたいなときに、神とその僕と信仰心を穢すほど、腐りきった、救いようのない、悪逆非道なものが存在するなんて。いまや神は、やつらだけでなく、国民のすべてに天罰を加えようとして、いわば剣<sup>つるぎ</sup>を抜いて構えているというのに。

最初のうち、やつらに少しムカついたのは確かだ。といっても、ぼく個人が受けた侮辱のせいではなく、やつらの神を罵る舌がぼくを心底怯えさせたからだった。けれども、心に抱く憤りは、すべて私的な感情のせいで生じたんじゃないかと内心疑ってもいた。なにしろやつらはひどい言葉をたっぷりと浴びせてきたんだから。それもぼく個人に向けて。でも、しばらく考えたけれど、心に重い嘆きを抱えたまま、家に帰り着いてすぐ寝床についた。前の晩は寝ていなかったからだ。そして差し迫る危険のなか、自分を護ってくださった神に心からの誠意をこめて感謝を伝えると、ぼくは敬虔な気持ちと偽りのない心で、あの救いのない悪人たちのために祈りを捧げた。神よ、あの人びとを赦し、その目を啓き、おのずから謙虚な気持ちを抱くようにしてください。

これによってぼくは義務<sup>3</sup>を果たした、すなわち自分に害を

<sup>3</sup> Mullan (233)、Bakscheider (60) とともに、この義務が『マタイによる福音書』5章44節(「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と『ルカによる福音書』6章28節(「悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」)を念頭に置いたものだと注をつけている。

なす者のために祈ったというだけでなく、ぼく自身の本心をすっかり満足のいくまで探ることもできた。こうして、やつらはぼくを標的に攻撃したけれども、ぼくの心が憤りの感情でいっぱいになったわけじゃない、と判ったんだ。神を敬う真の熱情なのか、私的な憤りやムカつきのせいなのかハッキリと判別したい人は、みんなこの方法を用いてはどうかと、卑見ながらお勧めしたい。

でもそろそろ、感染が広がるなかで起きた出来事で、特に心に浮かぶものに話を戻そう。とりわけ病気が流行りはじめたころ、家屋が閉鎖されたときのことを話したい。病気が猛威をふるう以前は、その後と比べて観察する余裕があったからだ。ところが危機が頂点に達すると、前のように互いに連絡をとることもなくなってしまったんだ。

(東京大学准教授)